

ぐるっけ

平成六年七月二十七日第三種郵便物認可
平成十五年十一月一日発行（毎月一回一日発行）
第十卷第七号（通巻第一一五号）

鈴



ぐるっけ

俳句雑誌

GLOCKE

第115号

11. 2003

PDF制作

俳誌のsalon

爆
心

品
川
鈴
子

血より濃き紅葉の一樹爆心に

歪みたる被爆の眼鏡黄葉照り

石切りのケロイドさらす紅葉山

ケロイドを擦らん風呂のふやけ柚子



電気メス身を焦がす臭そぞろ寒

原子村より注意扱ひ熟柿の荷

敬老日乗馬の構へこころせむ

蒜山の男顔の側も薄紅葉

曲り屋の竈に噴きて零余子飯

納屋に立てかけし案山子はオシラさま



玉 鈴

愛媛 武司 琴子

かなぶんと一つ灯のもと鍵叩く
行き行きて小径小曲り草いきれ
伊達者賞受く長老の浴衣掛け
熱帯夜羊の数も千を越え
葉代の釣銭奉じ原爆忌

大阪 竹下 昭子

虫干や昭和動乱の記事暴す
松濱の自筆句稿の虫払い
接近の火星は赤し虫の声
渋滞を尻目に紀伊の魂送り
闇せまる防波堤へと魂送り

和歌山 田中嘉代子

七色の玉虫飛べば碧く見ゆ
土用鰻盃の中で泳ぎある
初盆に大きな花籠届きたり
抽ん出し稗真青なり大棚田
穂孕みし稲田青田と段をなす

吟

兵庫 田中倫代

夕顔や肩怒らせて猫の来る
ひまはりに背を向けられてゐる二人
初恋のかはきやすさよ金魚玉
打水や踵にあまる男下駄
さからはぬこと覚えたり心太

大阪 谷 泰子

内裏野の爪先上り苔の花
青苔の天鷲絨敷きし宮居跡
幻の宮祉に生えし梅雨菌
口開けて陶狸夏雲見てゐたる
陶窯の火色に揺るる凌霄花

愛媛 筒井圭子朗

金魚掬ひの少女金魚の浴衣着て
形代の裏返りつつ着水す
石鎚の登山の土産肉桂水
鳴子踊り幼なも紙の法被着て
墓掃除墓地に常備の用具函

兵庫 内藤 三男

健次忌や紀伊の岬の忘れ潮
帰省子の一冊の本もてあまし
一病を守りて今日あり冷奴
帰り来て先づ水を足す水中花
河骨の花を沈めて水閑か

大阪 中島 霞

満載のリヤカーを曳き西瓜売
大暑かな軋みつ回る洗濯機
捕虫網高きへ父の手も借りて
農小屋の傾ぎもつとも蔦茂る
教会へ上る百段風涼し

大阪 中田 征二

達磨船今日飾られて渡御の列
船祭左右に岐ちし川出づる
どこ船縦横無尽に漕ぎ廻り
船祭祝ひて三度チヨチヨンノチヨイ
仰向きの顔に落つなり火花屑

大阪 中田 寿子

朝顔の鉢を残して転校す
天上のうからも見るや大火花
月見草終電待ちて萎み初む
三輪山の緑陰に神御座します
朝市のトマトの形不揃ひに

愛媛 永野 秀峰

梅雨晴間校庭の樹々消毒す
異人館七夕短冊英字なり
一山が累代の墓草を刈る
踊果て独り舁に戻り来る
踊に行く舁の歩板渡りては

高知 西村 椿子

雪解水堪え切れずの大放水
千丈の落差ましろし称名滝
岐阜提灯せめて豪華に初の盆
峡谷に生れ産湯は谷清水
町と村合併賛否梅雨に入る

薬草歳時記

(一一四) 舞茸

須賀悦子

朝市の掌をもみてぬ舞茸に

長谷川かな女

舞茸は水楢、小楢などの広葉樹の老木、樫などの大木の根元に発生する菌きのこですが、山中でこの茸を見つけると踊りあがつて喜んだからとか、又、蝶が舞うような形をしているところからこの名が付いたとも云われています。

最近はおガクズを利用した促成の栽培品も多くなりましたが、天然の舞茸の香りと美味しさは格別な秋の味覚です。

古来より、漢方処方に配剤されている「猪苓」は、同じサルノコシカケ科のチョレイマイタケの菌核で、解熱、止渴、利尿薬として用いられておりますが、現在は中国産のものだけが使われているようです。日本で産出する舞茸にも、他の野菜に見られないエルゴステロール（プロビタミンD）ピタミンB₁、多くのミネラル、アミノ酸、多糖類が含まれています。多糖類のベーターグルカンに免疫力が強く抗腫瘍作用もあることから、近年になり急速に抽出方法の研究が進み、健康食品、薬用として注目されるように

なってきました。

このマイタケ研究の第一人者としては神戸薬科大学の難波宏彰教授が有名ですが、「マイタケ D₁フラクション」の抽出製造の特許を米国、日本で取得され、実際に病院等の医療現場でその効果を試しておられます。

マイタケの抗癌作用と血圧、血糖値、コレステロール値の低下を期待して癌等の成人病に、又、米国では肝炎、エイズにもその効果が期待されているようです。

今春、私はロサンゼルスで開催された「ナチュラル・プロダクツ・エキスポ・ウエスト二〇〇三年」のフェアに参加させて頂く機会があり、多くの健康食品（サプリメント）を見てまいりましたが、世界中の人達の健康に対する関心度の高さ、肥満など生活習慣病の予防を考えての食品の多さは、驚くばかりです。健康で強く美しくスマートでありたい為の食品、商品でその出品数は約三万種とか。日本からの漢方薬、豆腐、舞茸等も日本語のまゝ紹介されておりましたが、米国へ世界中から集まる医薬品と健康食品のあり方には興味を覚えたことでした。

参考文献 「原色牧野和漢薬草大図鑑」 北隆館

Maitake Mushroom and D-Fraction

Shari Lieberman, Ph.D. Ken Babel, C.N.

Woodland Publishing

著者略歴 神戸薬科大学卒

マイタケ(マイタケ属)(サルノコシカケ科) *Grifola frondosa*

(舞茸)

(英) Maitake mushroom

(Dancing mushroom)

小柄の古木に生じた舞茸
全体の直径 約30cm



須賀 敏子 画

根
径 約3cm

食用部分：子実体

(提供：三輪愛子さん)

子実体の縦割り
切断面

生きている舞茸提げて来たりけり

加藤知世子

舞茸をかかへて転げ落ちたると

矢島 渚男

舞茸の舞はねば消ゆる月の前

石 寒太

舞茸を採る山姥の貌をして

島影かほる

熊棚の下で舞茸採りにけり

菅原庄山子

舞茸をひつぱりだせば籠は空^から

中田みづほ

奥山の舞茸膝に上京す

田中 愛子

舞茸が花とひろごり土瓶蒸

恩智 景子

舞茸をきしきしきしと噛みにけり

増沢 和子

舞茸の老木秘密とはならず

近藤 貞子

くろつけ

鈴の奏

品川鈴子選

鳥貌の女ばかりや浦島草 東京 佐田 昭子

玉虫のとまつてゐたる芥箱

古タイヤ立て掛けてあり木槿垣

ロシア兵の墓ある寺や額の花

父の書を開き黴の香立ち上る 愛媛 福島 松子

気の向くまま木の間草の間夏の蝶

床の間の螺鈿の小物谷崎忌

扇風機すすまぬ宿題煽りつつ

閑人と言はれ黙つて豌豆むく 兵庫 代田 正雄

露味噌が出てもう一本追加する

伸び速き嬰の爪透く梅雨の明け

走馬燈ゆつたり廻れ吾が余生

伝えたき言葉ありても黙す夏 兵庫 中尾 廣美

沙羅の花潔ぎよしと寂しとも

背のびして荅数ふる紅蜀葵

雨続き庭下駄につく蟬の殻

ロボットとなりし正客風炉手前 兵庫 川合 正男

肘ついて銘確かめる夏茶碗

庭涼し大碑しゃこ礪貝の手水鉢

涼風の動かしている麻茶掛

ピアノ買ふ約束果たしソーダ水 兵庫 林 美智

大阪の女ひとになりきり船祭

好きずきにごろ寝のあたま夏座敷

タイガースたのんまつせとごんご舟

うなだれる球児称えて蝉しぐれ 兵庫 土屋 利之

夏嫌い昭和の忌日続くゆえ

水見舞生きているぞと老師から

とんぼうよしばらくは邪魔甲子園

味噌っ歯をメロンに埋めにんまりす 大阪 石橋 萬里

二の腕の入れ墨跳ねる盆太鼓

水打ちて祇園一力動き初む

自治会の語り部となり終戦日

日野草おさなごの知恵あたらしく 大阪 八田 節子

柏手を打ちて置き去り夏帽子

打撲貌気付かれまじくサングラス

夫も亦われも不機嫌夏の風邪

京の宵留学生と食らふ鱧

鉦の稚児京の喝采浴びて行く

月鉦の見送り外す町の衆

盂蘭盆会一番乗りで僧来たる

校庭に工事音のみ雲の峰

天牛かみきりの掴めばぎぎつとよじり抜け

鉄棒をくぐり抜けたる夏の蝶

今朝の秋運動靴スニーカーのためし履き

客人を待ちかねひとりメロン切る

氷菓舐む伸びざかりなる三兄弟

騒音に負けぬ車道の蝉しぐれ

幕明けの拍子木キンと夏芝居

明易き猫のまどろみ我もまた

燕の子計ったように並びけり

凌霄の花にひそむや翅の音

凌霄の釣鐘揺らす旬トビの風

退院を迎えて別る夏日射

暑中見舞書く病室の床頭台

見舞来し夫は扇子を片手にし

大阪 嘉悦 洋子

兵庫 木原 今女

兵庫 恒成久美子

東京 松本 アイ

福岡 山口 和子

病なる殻を脱ぎたし蝉時雨

まだ父に尋ねたきこと墓洗ふ

踊りつつ幼馴染の遠会釈

床几にも席次のありて揚花火

祭の場変へては香具師の啖呵売

吹き荒し嵐の去りて月明り

朝曇り霧島山の目ざめなり

蝉取りの幹うら捜しまた五匹

木道の左右の蓮は背丈程

車中の児絵本で遊ぶ梅雨激し

霧を脱ぎ奇岩を走る岩清水

辻地蔵前だれに浴ぶ若葉雨

ビアガーデン高校野球に泡とばし

父祖の地に外つ国の人茄子作る

裏庭に黒き羽落つ原爆忌

休み田は蚊帳吊草の中に在り

異変でもおこるか蟻の大移動

咲くまでの月下美人の覇気どこへ

香水もお洒落も無縁吾老いぬ

いくたびも児の名間違ふ夏休

帰省の子どすんとリユククサツク置き

香川 辻 雅子

鹿児島 原田 圭子

愛媛 安部美和子

石積知恵子

伊藤マサ子

伊藤 康子

岡部三和江

秀 鈴 記

巻頭 三句 品川鈴子 評

四句 十五句 村上和子 //

* 選句は全て 品川鈴子

鳥貌の女ばかりや浦島草

佐田 昭子

閑人と言はれ黙つて豌豆むく

代田 正雄

鳥貌とは作者の造語だろうか、不思議な情緒がある。貌とは、かたち、すがた、顔かたちのこと。当節の変なファッションでは、髪や服装まで派手な彩と突飛な容が流行る。まるで鳥類を真似たような娘たちに、目を見張るのは浦島さながらの時代遅れか。五月頃咲く浦島草は紫褐色の仏焰苞をもち、垂れ下がる花穂の先が浦島太郎の釣り糸に見える奇妙さ。

床の間の螺鈿の小物谷崎忌

福島 松子

雨続き庭下駄につく蟬の殻

中尾 廣美

谷崎潤一郎の忌は一九六五年七月三十日。その著作は概ね耽美で華麗。日本的な伝統美に傾倒していた谷崎は、関東大震災後関西に移り住む。西宮、芦屋、神戸と住居を変えたが、唯一現存する住吉の「倚松庵」に長く住んで「細雪」が執筆された。床の間に飾られた螺鈿の小物は、まさに潤一郎のみ。

命あるものは死を免れる事が出来ない。まして地上では七日程しか生きられない宿命を背負っている蟬。人間のようには看取られる事もなく死を迎える。長年地中で命を保護した殻も、地上で役目を果たした後は無用のもの。雨のそぼ降る庭に這い出し少しでも安全な所で羽化を果たそうと、一寸の虫も命の大切さを知って、庭下駄にたどりつき無事役目を果たした命の抜け殻を愛しみの目で見ている作者。(以下略)